

三章 プラス思考

がんにかかったことは天災のようなものとして仕方がないが、そのほかの一連のことに関しては、自分は運がいい、とわたしは信じている。

もちろん、こんな病気にかかった以上、絶望や自棄（やけ）をおこす気持ちは当然ある。それでも自分が幸運だと信じるのは、きのうも今日もまだ死なないうで生きている以上、自分の気持ちを明るい方向にもっていくのが、賢くもあり、楽でもあると思うからだ。若いころは落ちこみ出したら止め処（ど）がなかったが、歳をとると熟してくるといのか、諦めが早くなるのか、それとも諦めの早い男と結婚したのがよかったからなのか、ある程度自分の気持ちが操縦できるようになったような気がする（気がするだけかもしれないが）。

何か自分の気持ちをひきたてることが要る！ と思ったわたしは、ツルツパゲになる日に備えて、帽子を縫うことにした。

何色にしよう？

わたし自身が一番好きな色は青みがかった深緑。次は、子どものころ 24 色の色鉛筆の中にあつた群青（ぐんじょう）色という、わずかに紫がかつた鮮やかな青。夫はこれを矢車草（やぐるまそう）の青だね、と言う。三番目が赤ワイン色。

幸いミラノのフツの洋服は日本の感覚からするとかなり安いので、田舎者のわたしもおしゃれに精を出して、この 3 色を中心に山ほど服を買っていた。その服に合う色の帽子ならば、ミラノファッションの基本である「色調をそろえる」に従っていっそうおしゃれができるではないか。

ちょうど、マントを縫うために買っておいた深緑と赤ワイン色の厚い生地が冬用の帽子にも最適だった。手持ちの帽子の中からこれは、というのを選んで、それを元に 6 枚はぎの型紙をつくる。

まず深緑。手縫いでちょこちょこ 2 度縫いをする。でかい。かぶり心地

はよく、非常に楽だが、今ひとつおしゃれでない。次の赤ワインは全体を少し小さくし、その代わり縁（ふち）の折り返し部分を大きめにしたら、我ながらなかなかのものに仕上がった。

気をよくして、今度はトルコブルーの帽子を縫う。この目にも鮮やかな色は、ミラノの暗い憂鬱（ゆううつ）な秋を一度に明るくしてくれるのだ。

帽子づくりは大成功だった。ただひとつの欠点は、帽子ではもみあげが隠れず、そこにあるべき髪の毛がないという違和感が生じることだが、まあそのくらいはしょうがない。メリットのほうがはるかに大きい。

かつらも注文した。週一度掃除に来てくれるシルヴィアのお母さんは1年前にやっぱり乳がんの手術を受け、化学療法で頭の毛が全部なくなったので、3万円足らずでかつらをつくり、喫茶店で働き続けたが、客の誰ひとりとしてかつらだとは気がつかなかったと言うのである。そのかつらをつくる美容師は自分も化学療法の経験者で、非常に理解があって親切だとも勧めてくれた。

行ってみてわけがわかった。髪の毛が抜けてしまう前に必ず一度行って、ふだんのヘアスタイルを見せておくように、と言われていたのだが、髪質と値段で材料を決めたあと、元のスタイルにできるだけ近く美容師がカットしていくのである。ただし、わたしの元々のヘアスタイルはかなり短めだったのに、美容師のカットはそれより長い。

「ねえ、もう少し短くしてもらえない？」

「あのね、かつらで同じくらい短くすると、地のネットが見えてしまっかつらとバレルのよ。特にもみあげのところが問題」

「あ、確かに。見える。こりゃダメだわ」

「でしょ。まあうまく似せてあげるから、これで我慢しなさい」

「わかった。でもサイズゆるくしてもらえない？ これじゃ苦しいわ。ふだんからわたし、きつい帽子でさえ苦手なの」

「ダメ、これはあなたのサイズよ、測ったとおり。あのね、かつらはズレても、風で飛んでしまっても困るでしょう」

「そりゃかなわないわ。大笑いになるか、大恥かくか。おしゃれも何もあつたもんじゃない」

「でしょ」

かくしてできあがりのほどは、あら美容院変えたのね、というくらいの違いしかなく、きわめて自然で、皆がほめる。髪が元の長さに戻るまで数カ月はかかるから、5万円ほどの値打ちは充分にあった。

ただ、サイズのきついのは、特に体調の良くないときには耐えきれず、結局わたしはもっぱら自家製の帽子をかぶっている。

最初の点滴の10日後に、日本から母が入院したと知らせがきた。今までにも入院はしているはずなのに、どうして今回わざわざ知らせてきたのか、わずかに違和感がある。わたしは化学治療を始めたものの、1回目のせいか、聞いていたのと違ってほとんど体調が変わっていなかった。これならば今帰れると、1週間の予定で飛行機に飛び乗って日本まで見舞いに帰った。気持ちのいい秋晴れの日で、関西空港から実家に電話をかけると、父親が、いつもとは違う、なんとも言えず独特な調子でゆっくりと一言、あのなあ……と言った。

その瞬間、わたしは自分が遅過ぎたことを悟った。

わたしがまだミラノの空港にいるあいだに、母はすでに亡くなっていたのだ。携帯電話がまだ普及していない時代で、それを知らずに、わたしはずっと飛行機に乗って、美術館の学芸員をしているというイタリア女性とおもしろく話をしていた。

父との話を終えたあと、ひとが後ろに来た気配を感じながらも、わたしは公衆電話の前で顔を伏せ、こぶしを握ってからだを突っ張らせ、声を殺して涙を流して立ちつくしたまま、しばらく動けなかった。

山青く空青くして母逝（ゆ）きぬ

陽は輝き稲は実りて母逝きぬ

スーツケース下げて通るは通夜の門

両親が長年つくっていた俳句が、わたしにも真似ごとながら浮かんだ。

母は夏の酷暑の中であえて肝がんの治療にとりくみ、がんは消えたが体力を落とし、同じくがんにかかった娘を案じながら、秋になって死んだのである。わたしはずっと母の期待に応（こた）えずよく心配させてもいたが、最後まで親不孝な娘であった。

母とわたしの共通の友人からは「まどかちゃんのがんになったけえ、心痛で先生の寿命が縮んだんよ」とまで言われ、「そんなこと言われたって、わたしだって好きでがんになったわけじゃない」と思いはするものの、親の気持ちとしてはやはり、子のがんになるというのは耐え難（がた）い心痛だろう。

地方名士であった母の、次々とひとが訪れる通夜と、200人の参列者のあった葬式を終えて、明日はイタリアに帰るという晩、妙に細い髪の毛が大量に抜ける。髪が汚かったが、洗うともっと抜けるのを見るのがコワイ。わたしを案じた夫から国際電話がかかってきたので告げると、「汚かろうがなんだろうが、恐れりゃ洗わんとき（洗わないでおきなさい）」と言われ、もっともだと脂照りする頭で飛行機に乗ったら、トイレに立っては肩の上の抜け毛を指でつまんで捨てる始末だった。

母の死に間に合わなかったのは無念だったが、このタイミングでなければ葬式にも出られなかっただろう。まだよかったと思うほかはない。体力が弱ってもがんの治療を選んだ母は、同じようにがんの治療をするわたしに、がんばれ、と伝えたかったのかもしれない。そう思うと泣けてくる。

髪の毛の抜け方には、最初の点滴をしたその日家に帰るやいなや抜け始めたというひともいれば、2カ月たってもまだ髪があったというひともいるくらい、

個人差がある。わたしの場合はそれから1週間ほど、指で髪をつまんで引っ張ると数十本すっと抜け、床の上から肩からイヤになるほど抜け毛を集めてまわり、地肌が見えるようになったときには、幽霊屋敷のお岩さん役がつとまるほどの醜さ、気味悪さに、鏡を見るたび、ぞっとした。

もうこうなったら一刻も早く全部抜けてくれたほうがすっきりする、とぼやくと、亭主殿が「じゃあぼくの髭剃り（ひげそり）で剃ってあげようか」と言う。それはいい考えだと、さっそく自分で残りの髪を全部短く刈ったあと、洗面所で石鹸を塗っては頭を剃った。夫が外国で理髪店に行くのはいやだと言うせいもあり、子どもも含め家族の髪はわたしがずっと切っているが、自分の頭をいじることはあまりない。が、丸坊主なら簡単だった。

1時間ほどできれいサッパリ尼さんのような頭になり、亭主は「チンネンさんみたいだよ。なかなかいいじゃないか」と笑う。

チンネンさんがどこの誰だか知らないが、わたしも結構気に入った。なんというか、わたしらしい、という感じである。子どもたちだけは、14歳から7歳まで口をそろえて嫌がったが、ひと月もすると慣れて何も言わなくなった。

子どものためもあって、ふだんわたしは今までと変わらず、冗談を言い、叱り、笑って過ごしている。まあ子どもが4人もいれば、気がまぎれるところの騒ぎではない。食卓では、いつも2人3人が同時に話すのを交通整理しなければならない。くたびれるが、実に楽しい。

子どもたちには、がんだと正直に告げてある。ただし、ケロリと笑って。だからお医者さんにかかっているんだよ、薬が効いて腫瘍は小さくなったんだよ、と。そうしていれば、たぶん、子どもたちもわたしの病気に、やたらと怯（おび）え、不安がることはないだろうと信じている。この子たちの生活を守らなければならない、という気持ちは、わたし自身にもプラスに働いている。

人間現金なもので、そうやって半分は芝居のようでも、言っているとだんだんその気になってくる。泣く日がないとは言わないが、忘れていられる時

間が長いのである。幸運だ、幸運だ、と繰り返しひとに言っていると、信じる気持ちも強くなる。

こうして、ひたすら強気で押して、「帽子を3つ縫って3つ買ったら、亭主が、おまえの頭は何個あるんだ、と言うのよ」と冗談を言って笑っていると、ヨーロッパ人は、いいことね、勝たなきゃね、その勢いなら大丈夫だわ、とにっこり笑ってくれるのだが、日本人にはとまどうひとがいる。なかには

「無理してるんじゃないですか？」

とご親切にも忠告してくださる方があって、わたしは猛烈に腹が立った。

「ええ、そりゃあもう無理をしまくって自分を明るくしているんです。でも、効きますよ。やっぱり、自分が自分のコントロールしなくっちゃ」

幸運のなかには、滞在4年目でわたし自身がイタリア語にずいぶん堪能になっていたこともある。よく勉強したものだ。

イタリアに到着する半年前から1年後くらいまでは、週20時間くらい文法だのなんだのみっちりやった。それまでは通訳か翻訳屋をめざして英語の勉強に週20時間かけていたのを、全部イタリア語に変えたのである。基本は英会話の勉強と同じ。基礎的な文法の習得に加え、日常単語と定型文の暗記・暗唱。しっかり暗唱しておけば、実際の場面でことばがスラスラと次々に「口をついて」出てくるようになる。

3年前にアメリカで1年を過ごしたときには、4人の子どもたちが7歳、5歳、3歳、1歳と手のかかる盛りで、わたしはかなりの覚悟で飛行機に乗った。そしてアメリカに着いてから2週間のあいだに、時差ぼけと猛暑とで4人のうち3人の子が熱を出し、最後の子は中耳炎だった。幸いアパートの向かいの部屋の住人が幼児連れのオーストラリア人で、小児科医を教えてくださいましたのですぐ行ったが、このときほど自分が英語ができてよかったと思ったことはない。母親にとって、外国でも子どもを医者連れて行って医者ちゃんと話ができるというのは、安心できる最底辺である。

子どもを育てたことのあるひとならみんな経験があるだろうが、小さい子

はお出かけや行事の日、「何もこんなときに限って」というときに熱を出したり腹をこわしたりするものと相場が決まっている。今回のイタリア滞在でも最悪の場合、日本からの飛行機を降りたとたんに子どもを医者連れて行くハメになるかもしれず、そのときわたしはイタリア語で医者と話ができる必要があった。その強い目的意識に支えられて猛勉強し、わたしはイタリアに着いたときには自分の言いたいことはとりあえず言えるようになっていた。

その後もイタリアでは夫の会社がつけてくれる個人教授に習い、市の無料講座や友人が開催する有料の会話クラスに通い、図書館で児童書を借りて読み、イタリア語で日記をつけ、外出するたびにおしゃべりを心がけ、友人と新聞を読み、英語とイタリア語の会話サロンを国際クラブの行事として主催し、とありとあらゆることをやった。たぶん、わたしは元々語学が好きなのだ。それに将来、英語に加えてイタリア語の翻訳もできるようになればいいな……という下心もあった。もちろん生活も便利になった。

とはいえ、実際には、当然ながら山ほどイタリア語をまちがった。

青果店に行って硬い白キャベツ（カーボロ）が欲しいときに、まちがってカバロ（馬）をくれと言ったことがある。青果店で馬を売っているはずはなく、小太りの女主人は両目をひん剥（む）いて「ない！」と即答した。が、そこは商売、30秒後、ひょっとしておまえの欲しいのはこれか、というふうに、不愛想に黙ったまま白キャベツを指さしてみせた。「そうそう、それよ！」とわたしはニッコリ笑い、続けて「わたしまちがえたのよね？ それ、イタリア語で何て言うんだっけ？」と尋ねた。女主人は憮然としたまま「…カーボロ」とつぶやいた。

実はカーボロとは、悪口のカツォのお上品版である。カツォは元々「オチンチン」の意味だが、なぜか日本語の「クソッ！」と同じ感覚で使われている。下半身関連という点では同じということか。イタリアで何年か働いている日本人の友人によると、さあここは派手に厳しく抗議しなければ、とい

うときには、まず「カッツォ！」と大声で怒鳴ってテーブルをこぶしで一発ドンと叩いてから、とうとうと抗議を言い始めるもの、なのだそうだ。「おい！ ふざけるなよ！」のニュアンスだろうか。

が、慎（つつし）みのある女性はおチンチンなどという恥ずかしいことばは口にできない（もちろん、日本の「クソッ」と一緒に、女性でも言うひとは言うらしい）。で、代わりに、同じ「カ」から始まる「カーボロ」と言う。息子のサッカーの試合に行ったときにも、誰かが凡ミスをした場面で「カーボロ……」という母親の声を聞いた。この場合は「バカ……」というニュアンスである。つまり、青果店の女主人はわたしに「……このバーカ」と言ったと同じことになったのだった。

ハイハイ、ま、バカですねえ。

鮮魚店ではボンゴレ・ヴェラーチェ（あさり）をまちがえてボンゴレ・ヴェローチェと言って、店の女性に、あさは走らないわよ、と笑われた。ヴェラーチェは「本物」の意味だが、ヴェローチェは「速い」という意味なのだ。

でもね、わたしの買いたいキャベツもあさりもちゃんと買えたよ。

イタリアに来て半年もたたないころ、車の暖房が故障した。車を修理業者を持って行って説明しなければならない。辞書をひくと、イタリア語で暖房はリスカルダメントとある。「ややこしいわね、リスカルダメント、リスカルダメント」と何度か口に出して言ってみたが、亭主の運転する車に乗った5分後にはすっかり忘れていた。一生懸命脳ミソの隅々まで探してみるが、その日初めて学んだややこしいことばは1音たりとも残っていない。

しょうがない、別の知ってることばでなんとか説明しよう。

考えたあげくに「寒いとき、暑い風欲しい。でもわたしできない」と言ったら、修理業者の目は一瞬点々になったが、すぐに理解した。「あ、暖房が効かないんだな（イル リスカルダメント ノン フンツィオーナ）」

要するに通じればいいのよ、ことばなんて！

別の幸運には、わたしが長年英語の勉強をしているあいだに多少の医学用語にも慣れていたことがあった。乳房 X 線撮影を意味するマンモグラフィ（イタリア語ではマンモグラフィア）程度ならすでに知っていた。英語の医学用語はラテン語起源のことばが多く、ラテン語はイタリア語ときわめて近い。だから、英語を元にしてイタリア語の医学用語の意味を推測することが、かなり簡単にできた。子どものインターナショナルスクールのイタリア語教師はこの2つの言語について、似ているが「ラテン語は死んでいる（今は誰も話さない）けど、イタリア語は生きている（今使われている）」と言っていた。

こういったことばの自信がなければ、とても外国で長期の治療を受ける気にはなれない。もちろん、すべてがわかるわけではないが、わからなければ尋ねるし、イタリア人は一般におしゃべりで親切だから、よく説明してくれる。

それから、同じ外国でもアメリカではなくイタリアであったこと。夫によると、アメリカではイタリアほど乳房温存が盛んではないらしかった。リスクを避けるため、潔く全部摘出して、オシマイ。わりきるのが得意なアメリカの国民性を考えると、納得できる。

最大の幸運は、国際クラブのおかげで多数の友人がいて、信じられないくらいあれこれと手伝ってくれていることである。イタリアで治療、という方向が決まったとき、わたしは長くミラノに住んでいる友人 9 人にメールで連絡をとった。イタリア人 5 人、フランス人 1 人、インド人 1 人、日本人 2 人である。日本人以外は全員クラブのメンバーだった。まだイタリア人の大好きなヴァカンスの季節だったから、大事をみこんで多めに連絡をとったのだが、一般的なものから個別の情報まで、あっという間に手に入った。ミラノの病院の基礎知識がまるでないわたしにとって、9 人のうち一番多くのひとが推薦する病院が一番良からう、というもくろみもあったのが大当たりで、国立がんセンターの予約などは、友人 3 人がわたしの知らないうちに申し

込んでくれていて、受付が「またマドカ？」とあきれたほどだったのである。

日本人のひとは、イタリアの病院の仕組みをよくよく説明してくれた。

日本だと、まずどこの病院に行くか、という選択をする。が、ここでは、治療を国民保険で受けるか民間保険で受けるか、から話が始まるというのである。イタリアの国民健康保険については前に少し書いたが、金銭的には基本的に無料あるいは低料金で治療をしてくれるし治療の質も悪くはないのだが、時間的にはひどいもので、総合病院の専門医にかかるには3か月以上待つのがまれではない。日本では無理をしてでも予約を押しこみ、患者にとっては「3分診療」、医者にとっては「長時間の過重労働」となるのと対照的に、イタリアでは受診予約がとりあえずいっぱいになるとそれ以上は押しこんでくれないのだ。わたしのように口が悪いのは「自然に治るか、ほっといて悪くなって死ぬかどっちかだよ」と評する。

これを嫌って、民間の医療保険を使って、日本で言う「いわゆる保険外」または自由診療のみで、病院にかかるひともいる。その保険代は決して安くはないから、民間保険ですべてをまかなうのは、はやい話が金持ちと会社がかりの外国人のみである。当時の総中流階級の日本とは違って、イタリアは貧富の差が激しい。最貧層にあたる乞食（こじき）、すり、泥棒、売春婦は日常的にめずらしくない。

交差点の停止線の前に立って、止まる車に手をさしだすぼろを着た男や女はなんだろうと思ったら、乞食である。中には『わたしは戦乱のユーゴから来た。イタリア語はしゃべれず職もない。お恵みを』と書いた段ボール紙を片手に持っているひともいる。最初は慣れないせいもあり無視していたが、そのうち可哀そうになり100円くらい恵むようになった。昔読んだ児童文学全集の中の一節を思い出し、善行を積んでいけば天国に行けるのかな、などとぼんやり考える。

地下鉄の中では中年男がバイオリンを弾き、子どもが金をくれとコーラの紙コップをさしだして乗客のあいだを回る。旋律は短いが音色は悪くない。

道端にミニスカートで立って車の来る方角を見ているのは売春婦である。男が車を止め、商談成立なら女が車に乗りこみ、モーテルだか青天井だか男の自宅だか女の部屋だか知らないが、人類最古と言われる商売をおこなう。縄張りがあるらしく、たいてい同じ場所に同じ女性が立っている。もちろん背後にはマフィアがついていると言うが、白人も黒人もいる。黒人は、地中海のすぐ向こうのモロッコ出身者だろう。冬のミニスカートは寒げで女性は股火鉢（またひばち）をしていることもあり、本来の行為そのものもだが、楽な商売ではないなとつくづく思う。なかにはどう見ても40歳過ぎ、という女性が町はずれの高速道の降り口付近にいつもいて、あれで食べていけるのだろうか、いつまでもやってはいけまいに、とわたしが妙な心配をしてフランス人に聞くと、年金のおじいちゃん相手にね、安くしてるのよ。特別サービスしたりしてね、だからお客はいるの、と説明された。

夏になると娼婦のなかには豊かな乳房を丸出しにして道端に立っているのもいて、朝の10時に子どもの通学路でそれを見たとき、わたしはおったまげて、もう少しで車を電柱にぶつければよかった。ミラノの豪華なチミテロ・モニュメンターレ（記念墓地）のあたりでは、車が通るたびにスカートをまくりあげる女もいるわよ、とドイツ人が言っていた。もちろんスカートの下には何もはいていない。

信じられない、とイギリス人の元校長のカレンが嘆く。まだ売春宿のほうがいいわ、通学路に出ないだけ。通学路だけは勘弁してよ。

わたしのイタリア語の個人教師だったパトリツィアの解説によると、昔は日本同様に赤線地帯があったのだけど、なんとかという女の大臣がけしからんと廃止にしたせいで、売春婦がいっせいに路上に出ることになったのよ、あれは浅知恵だったわね、となる。

売春婦は直接わたしたちの生活に害をおよぼさないが、泥棒やすりは害がある。

ポーランド人のヴィエシャは、施錠し忘れたガレージの扉から夜泥棒に入られて貴金属をやられた。インド人のエリザベスはミラノの街中で車を運転

して、道を聞かれて答えているあいだに、助手席側の窓から別の男にハンドバッグを盗られた。道を聞いたのももちろんグルである。イタリア人のルチアでさえ、地下鉄から降りてみたらハンドバッグの口が開いて財布がなくなっていた。わたしは家族でローマ観光に行った際、赤ん坊を抱えたロマ（当時の呼び名はジプシー）にバスの中で財布をすられた。赤ん坊を抱えるのは、わたしのようなお人好しを油断させる巧（うま）い手である。

そのため、ロマは赤ん坊をさらう、と言われていた。パトリツィアが言うには、母親がスーパーで赤ん坊を乗せたカートを離れて隣の列に行くと、赤ん坊がいなかったことがあるそう。スーパーの店主は賢明で、すぐさま出入り口を全部封鎖した。警察が探したところ、トイレから出てきたロマの女性の長〜いスカートの下に、眠らされ、頭を剃られた赤ん坊が隠されていたという。

とんでもない話で、「マドカ、子どもから目を離しちゃダメよ。子どもだけで外出させてもダメ」と大マジメな顔でパトリツィアはわたしに注意していた。実際、子が小学校のあいだは、イタリアの親や祖父母は毎朝毎夕通学に付き添う。どの学校も校門には鍵がかかり、インターフォンを鳴らすと中の事務室で鍵を開ける。校門の外には駐車場がある。ウチの子どもたちは、これも鍵付きの門のある団地の外でスクールバスに乗っていたし、なにせ4人いたから、わたしはさほど神経質にはならずすんだが。

しかしこれだけ治安が悪くても、アメリカと違い、すぐ銃でパン、ということはないので、生命の危険はほとんどない。まだマシだと思うことにしている。

一方、子どもたちの通っているインターナショナルスクールなどには、文字通り桁（けた）が2つ3つ違うイタリア人の富裕家庭の子がゴロゴロいて、ウチの子が誕生日パーティに招かれたあとでわたしが迎えに行っても、住居の広いこと、家具の趣味がよくて高そうなこと、結構な絵だの置き物だのがちょうどいいところにポツポツとあること、住みこみの召使のいること、とまるでショールームか映画の中のような別世界である。けばけばしく品の

悪い成金趣味は、さすがミラノ、見たことがない。子どもたちにもその豪華さと美しさはわかると見えて、ぼうっと夢でも見ているような顔をして帰ってきて「ねえ、母さん、ウチももう少しきれいにしようよ」などと言うものだから、恐い顔をして言い聞かせねばならない。

「眼をさましな。あのね、2倍くらいの金持ちなら少しは真似ができるよ。でもね、10倍100倍の金持ちのやることはとうてい真似できないよ。無理、絶～対無理。ウチはウチ、よそはよそ！」

さて、民間保険利用、つまり日本で言う保険外診療のみの医療を受けている場合、かかりつけの医者で紹介などで、指名して高名な医者にかかることができるらしい。わたしが勧められたのは、直前に厚生大臣をし、数年前にヨーロッパがんセンターを設立したというヴェロネーヅィ氏の息子で、1回30分の診察が日本円換算で2万円だった。

手術の場合は公立ないしは私立の病院の手術室を「借りて」おこなうという。出張サービスのようなものだろうか。請求書は、医者からと病院からと別々に来る。入院中の環境が豪華ホテル並みとなるか、まずい食事と暗い部屋になるかは、医者がどの病院にコネがあるかと、患者の懐具合などを考えての選択によるらしい。

わたしの場合、民間保険には入っていないから、初めからできたら公立病院のほうががいいと思っていたが、幸い、ミラノには2つ、がんだけを対象としているがんセンターがあった。民間保険の患者も、国民保険の患者も、受け入れるという。

ひとつは正式名称「腫瘍の研究と治療のための国立研究所」という名前で通称「国立がんセンター」、もうひとつは今書いた「ヨーロッパがんセンター」である。こっちのほうが新しい。国立がんセンターにかかるのに必要な紹介状をもらうため近所のかかりつけ医に行った際、ついでにヨーロッパがんセンターについても尋ねてみた。彼女が言うには、治療の質は同じ。ただヨーロッパがんセンターのほうが5年前かそこらにできたばかりで新しい

からきれいだし、あれこれときちんとしている、のだそうだ。少し迷ったが、その程度の違いしかないのならば、すでに予約がとれている国立一本でいこう、と腹を決めたのだった。

数え切れない幸運のもうひとつは、この「国立がんセンター」はがんの治療に関してはヨーロッパでも何本かの指に入るすぐれた病院で、イタリア中から患者が集まってくるという評判だった。その結果、日本では地方住まいで、東京のがんセンターでさえかかれる可能性は皆無だったわたしは、日本にいるよりはるかに高い質の治療が期待できたのである。

さらに、夫の勤務するアメリカ系製薬会社のイタリア研究所は、がんの治療薬だけを研究開発しているのだが、この病院と提携して新薬を試す臨床試験をしていた。つまり、ここでは夫関連のコネがきく。実際、わたしの友人の夫であり、わたし自身の友人でもあるイタリア人のジャンフランコは夫の会社の重役クラスで、わざわざわたしのためにがんセンターの医者と話をしてくれた。イタリアでコネはものをいうから、わたしはいい治療を受けられる可能性が高い、というわけだ。

夫のがんの薬の開発にたずさわっているから、あれこれと知識がある。夫によると、「欧米ではがん専門の『腫瘍科医』がたくさんいて、抗がん剤の治療つまり化学療法を担当し、一方外科医は手術だけを担当するのが普通だけれど、日本には腫瘍科医がすごく少なくて、外科医が化学療法も担当することが多い。でも化学療法は元々外科医より内科医の分野に近いから、日本だと副作用の管理に自信がなくて、ずっと入院になる。ここは腫瘍科医が担当してるから、通院で抗がん剤治療ができる」ということらしい。わたしにしてみれば、4人の子を家において長期間入院するよりは、通院のほうがよほどいい。

あんたの副作用も、そりゃあキツイのは可哀そうだけど、医学的には軽度のものばかりだね、と夫は涼しい顔をしている。「重度の副作用とはね、白血球の減少なんかだよ。それに1週間吐き続けて寝こんでいるわけでもないだろう、あんたは軽いほうだね」。そう言われても、わたしの実感がキツ

イのに変わりはないのだけれど。

また、日本でも知られているように、日本の厚労省が許可している薬よりは、イタリアで使われている薬のほうがはるかに種類が多く、しかも最新のものがたくさん含まれているそうである（その分リスクも高くはあるが）。だから、わたしが寝こんでいるのは毎回3日程度なのも、薬の種類が違うせいなのかもしれない。

ところで、わたしに闘病生活の援助を申し出てくれたのは、クラブで10人以上いた。フランス人、イタリア人、イギリス人、アメリカ人、南アフリカ共和国人、インドネシア人……。中には、点滴へ通うのに運転してやろう、と言ってくれるひともいた。身内に化学療法の経験者がいて、どんなに辛いかわっているひとたちである。

この国で、あまり日本人とはつきあわず、もっぱらイタリア人や外国人と親しくしていると、だんだん考え方も影響されて変わってくる。ひとつは、妙な遠慮をする必要はない、ということだ。欧米人は「お義理」を言わないから。イタリア人は多少お義理も遠慮も言うので、日本人に近いところがある。が、あの、お茶漬けでも食べていきなはれ、と言われたら、実はもう帰りなはれという意味だという「京のお茶漬け」ほどではない。他のヨーロッパ人は、イギリス人にしろ、フランス人やスウェーデン人にしろ、家に来ないか、と言ったら本気で誘っているのであり、乗せて行こうか、と言ったらほんとに乗せていくのに何の不都合もないから言っているのである。日本のように、「ホントは今日は寄るところがあって困るんだけど、このあいだ乗せてあげたから今日も言わないわけにもいかないわ、あのひといつも当てにしてるんだから」といった、腹と口が違うことは、まずない。用事があれば「ゴメン、今日は乗せてあげられない」とシンプルに言う。

最初はかなりとまどった。

日本式に一度目に礼儀正しく遠慮して断ったら、その気がないと判断されて、二度とお呼びがかからない。こっちは当てがはずれて、さみしささえ感

じる。だんだんこのやりかたがわかってくれば、今度は自分から、ねえ、お願いできる？ と尋ねていいとわかるのだが、あまり親しくない段階で、そんなずうずうしいことは言えない、というのが身に染み付いた日本の文化である。わたしはここで初めのころ、自分が思っていたよりずっと日本人らしいことを発見して驚いた。今度こそは思い切って言ってみよう、と覚悟していたつもりでも、いざその場になると遠慮してことばが口から出てこず、機会を逃がすのである。

最初の1年はこの調子で、友人は少ないわ、英語はともかくイタリア語はヘタだわ、あたりの様子はわからないわ、イタリアのいいかげんなのにはとことんくたびれるわ、で暗いまま終わった。たぶん、イタリア暮らしの長い日本人にもっと頼っていたら、そんなに苦労しなくてすんだのだろうが、「イタリアに来たからにはなるべく日本人とつきあわない」というポリシーは死守するつもりだった。

いいかげんさの洗礼は、イタリアに着いた翌日だった。夫の会社の人事課の、ウチの家の鍵を預かっていた担当者がヴァカンスでいないので、決まっていた家にわたしたちは入れなかったのである。それも2週間。わたしは開いた口が塞（ふさ）がらなかった。日本なら、ウチの到着日が知らせてある以上、誰か他のひとに鍵を託しておくものではないか？

代わりに会社が金を払ってくれた台所付きのホテルでは、わたしたち親子6人に対して2人部屋2つで、ベッドは追加が2つ入っていたが、食卓の椅子は追加されていなかった。気が利かないではないか？ 夫とわたしは下の子をそれぞれ膝に乗せて食事していたが、3日目に夫が音（ね）をあげた。フロントに文句を言っても、椅子が届いたのは明朝だった。

そのホテルの部屋の台所の電気コンロをふたつ使うと、ショートして部屋は真っ暗になった。翌日も、その翌日も。わたしはそのたびに思い切り罵声をあげて、熱い鍋を抱えて隣の部屋の台所に移り、結局は冷蔵庫の中身や調味料も全部隣に移動させた。怒り狂ってフロントに行って抗議したが無駄だ

った。これが G7 の文明国家のホテルか！

夫の会社が申請したビザには不備があり、住民登録はしばらくできず、したがって車も買えなかった。わたしが役所の窓口で泣きつくと、「自転車に乗ったら？」と冷たく言い放たれた。これが多国籍企業か！これが先進国の役所か！

そのうち人事の担当者が入社してきて、わたしたちはやっと鍵を手に入れて家に入れることになったが、日本から送った簡易畳とふとん一式はまだ届いていない。船便は 2 カ月で着くという話だったのに、2 カ月半かかった。夫の上司が貸してくれたエアマットレスは、どれだけ一生懸命空気を吹き込んでもパンパンにはふくらまず、横たわるとからだのどこかが木の床に当たった。

この調子で、毎日何かがうまくいかず、猛烈に腹をたてたり、ガックリきたりする繰り返しだった。おまけに、異国では何かと勝手が違う。

車を買う前にレンタカーを借りたら、ヨーロッパは基本マニュアル車。さっそく左折の際に交差点のど真ん中でエンストして、どえらい冷や汗をかいた。それにミラノ市街は一方通行だらけで、あらかじめ地図で予想していた道順はたどれず、すぐに迷う。日本の道路は基本的に碁盤の目状だが、ヨーロッパは大きな教会や広場から放射線状に道が伸びているから、道を 1 本まちがえると、元の道に戻るのが容易ではない。ナビなどまだ存在していない時代である。

生活も、わたしがイタリア語を多少わかるとはとっても、洗剤ひとつ買うのにも長いことかけてラベルを読んで、それでも自信が持てない。肉は薄切りを売っていない。イタリアにリゾットという味つきの米料理はあるが、その米を白ご飯にするとまずい。日本から炊飯器を持参したがうまく動かず、生まれて初めて鍋で 6 合の米を炊くと、米に芯が残ったり、粥になったり、鍋をひどく焦がしたり。スチールたわしでゴシゴシ 30 分かけて焦げを取っていると、涙がでてくる。

2 カ月たつと秋の半ばにさしかかって、なんとも言えず陽射しが弱く、あ

たりが暗くなりつつあった。毎日の生活はなんとか軌道に乗ったが、わたしは精神的に疲れはてていた。鬱（うつ）っぽくなって夫が心配したほどである。夫の上司夫人のカレンがそれを伝え聞いたらしく、わたしをイタリア語の会話教室に誘いに家まで来てくれたが、親切心は嬉しくても、落ちこんでいたわたしは家から出られず、そのうちにね、と断った。

変わっていくことができたのは2年目以降で、それでも、どれだけ「勇気をもって一步踏み出す」ことを繰り返しただろうか。「清水の舞台から飛び降りる」というが、ほんとに息をつめる思いでひとに話しかけたり誘ったりしたものである。慣れない外国でひとが寄ってきてくれるのを消極的に待っていたら、友人ができるわけではない。それなら自分から、ひとが寄ってくるようなことを積極的にしよう、と決心して実行することにしたのだ。

寿司に人気があるから国際クラブの行事として、手巻きや握り寿司の料理教室は3年間で10回ほど自宅で行っている。台所が小さいので、基本的に参加者は1回4人までと規模は小さい。一度クラブのメンバーの夫のほろが興味津々（しんしん）だと聞き、土曜に夫婦同伴の寿司教室を開いたときには3組6人来た。握りなど日本では買うばかりでつくったこともないのいい度胸だが、正月には着物の着付け教室まで、自宅とイタリア語学校でやった。なに、日本人はひとりも見に来ていないのだから、まちがっても誰にもわからない。洋服と違ってボタンもファスナーもなしに着る服という、あくまで文化紹介である。ドイツ人やアルゼンチン人、トルコ人、フランス人に着せつけて、見ているだけの参加者にもかなり喜ばれた。

自宅にひとを呼ぶとなると、ふだんろくに掃除をしないから、台所の掃除から居間のかたづけから一仕事あるのだが、友人を増やすにはずいぶん効果があった。国際クラブの行事係を引き受けたからには、スイスの湖行きも、美術館めぐりも、絹製品の買い物ツアーも組んだ。教会のガイドさえイタリア語と英語のちゃんぽんでやった。当たり外れもあって、3人しか来ないこともあれば、十数人来たこともある。まったくの自由参加なので、規模は小

さい。

そしてまたこうした行事を公的に組むのは、自分に積極的なサービス精神があるからで、お義理の口先だけではない。自分がやっていれば、ひとの誘いにもぽんと乗りやすいというもので、わたしとしては、「あれだけひとの世話をしたのだから、今度はひとの世話になってもよかろう」という、貸し借りの清算に近い感情で、闘病中はひとの親切を受けることにした。

ところが亭主殿は、「気兼ねだ」と言う。なにせわたしは、「マドカ、何をしたい？」と友人に聞かれたときに、きわめてすなおに「晩ご飯持ってきてちょうだい」と言ったのである。

手伝ってあげるわ、と言われても、ひとの家の掃除や洗濯に来てくれとは言えないではないか。家事のなかで頼みやすいのは料理と買い物くらいではなからうか。それに、実際問題として主婦のわたしが動けなければ、子どもたちの世話の応援を頼むにしても、残りの家事育児は全部亭主の肩にかかってくるから、それを軽くしてやりたいのは当然である。

毎回点滴後の1週間のうち週末をのぞく5日間、毎日誰かが晩ご飯を持って来てくれることになり、フランス人のマルティンは調整係をかってでて、当番表までつくってくれた。この当番は毎回変わり、最初の6カ国のひとのほかに、スペイン人、トルコ人、オーストリア人、ドイツ人も加わってくれた。

すると、各国の本場の家庭料理は、いつも日本人にとって口当たりがいいものとは限らず、子どもたちがやれ臭いだのまずいだの文句を垂れる日があったのは、いたしかたない。豆のスープ1品だけが届いて、大慌てで亭主がソーセージと野菜を炒める日もあった。それでも、異国の味に文句を言っても、なんにもなくて会社から帰った亭主が一から十までつくるのに比べたら、夕飯宅配サービスはありがたいことこの上なかった。

とはいえ胃の悪いわたしは一口も食べることができず、粥と白菜の漬物を嚙（か）んでいる。もうじき点滴、という日が迫ると、多少無理をしてでも

中華スーパーまで遠出し、白菜を買ってきて漬けるのである。これだけは口に入った。

さて、亭主殿の「気兼ね」である。

この感情はヨーロッパ人にはひどくわかりにくいものらしい。

「何なのよ、それは」と尋ねられる。

「施しは受けたくない、という意味なの？」

「違う、違う、悪いなあ、と思うのよ。申し訳ないって気持ち」

「あなたは何も悪いことはしてないでしょ、何が申し訳ないのよ」

「だってあなたに迷惑をかけてるじゃないの」

「迷惑？ そんなことないわ。負担だと思えば言うてない。あなたが困っているから手を貸してあげる、それだけのことよ。どうしてそれがイヤなの？」

わたし自身は、クラブのために貢献したから今度はひとに手伝ってもらってもいいと思ってる、と打ち明けると、

「あんた性格悪いわね」とくる。

口々に「考え、おかしいんじゃない？」だの「会長とかなんとか関係ないわ。会長やってなくたって、困っていれば助けてあげるって」だのと続く。

確かに、子どもがよその家に遊びに行ったりお泊りに行ったりするとき、初めごろわたしは日本での習慣そのままに、駄菓子１袋でも何でも持たせていた。向こうはありがたいとは言えども、反対に向こうの子がこっちに来るときは、まず手ぶらである。三度続けてわたしが子どもに何か持って行かせると、「マドカ、まあ、そんなことすることないわ」と言うけれども、だからといって同じように向こうが持たせるか、というと、そんなことはまったくない。

どうもヨーロッパでは、車を出す出さないレベルならば、このあいだあなただっただから今度はわたし、くらいのことはあるが、いろんなことで、いわゆる「お返し」をしなくてはいけない、という観念がごく薄いような気がす

る。もちろん、お互い外国で暮らす苦勞をわかっているから助け合わねば、という国際クラブ特有の理由もあるだろうし、感謝の気持ちもそれなりに表しはするが、受けたことと与えたことが同じでなくていいらしい。

できるときに、できることを、ごく気軽にやる。やったら、それでおしまい。

初めのころこそ落ち着かない気持ちにつきまとわれたが、慣れてくると、これだけ気楽なことはなかった。

亭主はこの、わたしへの手伝いの申し出の背後にあるのはキリスト教的博愛精神ではなからうか、と推論する。確かに西洋では、日本で考えるよりずっとキリスト教がひとの思考パターンにしみこんでいて、困っているひとがいるなら助けてあげる、困っているひとはそれをすなおに受ける、という傾向があるように思う。

亭主はまた、これは欧米の文化にあるボランティア精神の発露ではないか、と考える。ボランティア（ボランティアの）というのは「個人の自発的な意思に基づいて」という意味であり、集団的で強制的な社交儀礼や義務感、すなわち義理からくるものと正反対である。だから、「義理という感覚の薄いヨーロッパではお返しは要らないんだろうけど、ぼくは日本人だからやっぱり気になるんだよね」ということになる。

わたし自身も、「お返し不要」の背景に「個人主義」があり、それは日本の「集団中心主義」と対極的だという気が強くする。日本人は自分の属している集団をおそろしく重視し、他人と違う意見を言うことや違う行動をとることを嫌うから、もし誰かにご飯を持っていくとなったら、たぶん「みんな同じように」持って「いかなければならない」。そして義理から言ってお返しは絶対必要だし、みんなへのお返しが同じでなければ、ややこしいことになる。妙な平等思考だ。

一方個人主義では、それぞれが自分の価値基準や行動パターンに従って行動する。自発的でもあると言え、他人が何をするか、があまり判断の基準に

ならない。しかし、それぞれの良心や道徳観念があるのだから、利己主義ではない。自分がされてイヤなことは他人にしない、というのはここでの基本的な考えのひとつである。

同じように、わたしには自分の意見がはっきりある。それが通らないならしかたないし、他人に別の考えがあるなら、それはわたしの考えと同じように大切だから、無理に押しつけないとは思わない。が、言うだけは言いたい。やりたいことはやりたい。ひとが大勢やっているというのは、自分がそれをやる理由にはならない。自分が興味を持てるか、適当と思うかどうかが基準である。

この性格、日本では、我が強い、と言われる。特にわたしの世代の女にとって、ほめことばではない。

それがヨーロッパにいくと、なんと自然なことか！

わたしはイタリア生活がきわめて気に入っている。